

## (二人の老婦人)



バスに乗った時のことです。僕の後ろに縦並びに二人の白髪の老婦人が座りました。聞くともなく聞いていると、どうやら駅のバス停で初めて知り合って話し始めた様子です。

一人はやや大柄で滑舌がはっきりしてい、もう一人は小柄でおっとりした口調です。ただ共通しているのは二人ともどこかとても上品な感じがすることです。

「近頃、気力、体力、財力が落ちまして、何をするにも四捨五入。適当に切り上げたり、切り捨てたりですわ。いけませんわよねえ」

「私もですの。でも仕方ありませんわ。歳をとったら、そういう算術を使わないと暮らせませんものねえ」

「私はひとり暮らしですが、お宅さまは？」

「私もですわ」

「皆さん、お一人で大変でしょう、お寂しいでしょうとおっしゃってくださるのですが、案外そんなこともなくて、誰にも気を遣わないで済むので、思うように好き勝手が出来て、却って気楽でいいですわ。ただちょっと雑になるのがいけませんけれど、ゴミ屋敷にならない程度には立ち働いておりますの」

「ほんと、余計な気遣いをしないのが長寿で元気な秘訣かもしれませんわねえ」

「ちょっと、寂しければ、こうして街で知り合った方とお話しすれば済みますものね」

「ところで、どちらまでおいでになさいますの？」

「終点の近くまで。坂の上のマンションのあるところすわ」

男のご老人と女のご老人ではいささか感想が違うのかもしれない。

男の人は、独りになるとやたらと孤独を感じるひが多いようですが、女の人は却って開放感を感じているような気もします。昔の夫婦というのは、家庭生活では、旦那さんは奥さんにお世話になり放し。奥さんは旦那さんのお世話をしっ放し。つかえ棒が外れた旦那さんと、重しがとれた奥さん。その差が孤独感と開放感の差になっているのではないのでしょうか。

いずれにせよ、ひとり暮らしのご老人が「寂しくて仕方のないお荷物」だという十把一絡げ

の一方的な認識や解釈は改めた方がいいような気が致しました。